

CINEMA
carrot
Vol.04

痛くない
死に方

6月は3作品
上映しますよ～！

毎月
映画上映
しています！



2021.6/9 (Wed.) ⇨ 2021.6/22 (Tue.)
@ 洲本オリオン

■上映スケジュール

6/9～6/15 13:00～ 15:40～
6/16～6/22 10:20～ 13:00～

■料金

	当日窓口	会員
一般	1800	1500
大学生・専門学生	1500	1200
高校生以下	1100	1000
シニア (65 歳以上)	1100	1000
障害手帳保持者	1100	1000
水曜レディースデー	1100	1000

ライン登録であなたも
シネマキャロット会員



■洲本オリオン

〒656-0025
兵庫県洲本市本町5丁目4-8
tel: 0799-22-0265

シネマキャロット代表
おたしほの作品紹介

今月はとても interesting な人間に会えました。『お医者さん』も『人間』だった。6月の映画『痛くない死に方』はドキュメンタリー作品『けったいな町医者』の長尾和宏医師が書いた書籍が原作。尊厳死。平穏死。看取り。ラストドクター。自分らしく生きること。自分らしく死ぬこと。たぶん、産まれてくるときも、自分らしく誕生したはずだ。農家として、お野菜も人も同じだな、と感じた。いい枯れ方が「生きた」ということの表れなんだと。

痛いとき痛いと言ひ、楽しいときは楽しいと表現していこう！

人間を好きになれ

第23回
上海国際映画祭
正式招待作品

監督・脚本：高橋伴明 原作：長尾和宏「痛くない死に方」(ブックマン社)
在宅医と患者と家族の物語

柄本佑

坂井真紀 余貴美子

大谷直子 宇崎竜童 奥田瑛二

大西信満 大西礼芳 下元史朗 藤本泉 梅舟惟水 諏訪太郎

田中美奈子 真木順子 亜湖 長尾和宏 田村泰二郎

東山明美 安部智彦 石山雄大 幕雄仁 長澤智子 鈴木秀人

製作：長尾和宏／内藤朗／人見明史／小林未生和／田中幹男
プロデュース：見留多佳城／神崎良／小林良二
アシエイトプロデュース：鈴木和／丸山隆
企画協力：小宮重里 音楽：吉川忠英 撮影：照明 今井哲郎
美術：丸尾知行 録音：西條博介 編集：鈴木敏
助監督：毛利安孝 制作担当：植野亮 衣裳：青木茂
ヘアメイク：結城春香 医療協力：遠矢純一郎／井尾和雄
制作：Gカンパニー 配給：立花洋行プロダクション
製作：「痛くない死に方」製作委員会
2019 JAPAN'Side DCP 112min

<http://itakunaishinikata.com/>



シネマキャロット diary

淡路島に住んで6年目に突入！！

農家4年目です。主にニンジン、唐辛子、黒豆作ってます！

ニンジン、ジャガイモの収穫に、夏野菜の草引きのお手入れなど、農作業が目白押しです！

6月は2作品の上映に加えて、3月に上映して好評だった『37 セカンズ』のリバイバル上映が決まりました！！今後たくさんの作品から選んでいただくことができるようになりますので、ワクワクしてきた今日この頃です。1つ目は『痛くない死に方』

私が大好きな俳優さん、柄本佑主演。大好きで選んだのか？と思われるかもしれませんが、ま、それもあります。テーマは尊厳死。平穏死。在宅医と患者と家族の物語。

医学の進歩に伴い「延命治療」が可能になった。そこにはかつてあった自然な死はもはや存在しない。生き方の選択肢が広がったはずの今、人は死に方は選べないのだろうか。

自分らしく生きることじぶんらしく死ぬこと

農家として、お野菜も人間も同じだな、と感じた。

いい枯れ方が「生きた」ということの表れなんだと。

シネマキャロット代表 おおたしほ

今月は3作品上映しますよ～！！

	6/9(水)～15(火)	6/16(水)～22(火)
けったいな 町医者	10:20～	15:40～
痛 く な い 死 に 方	13:00～ 15:40～	10:20～ 13:00～
37 Seconds リバイバル上映!!	18:20～	—



instagram



facebook



note

問合せ：090-7359-8927 おおたまで



INTRODUCTION 医学の進歩に伴い、「延命治療」が可能になった。

そこにはかつてあった自然な死は最早存在しない。昔の日本は死に方を選べなかった。

生き方も同様かもしれない。しかし選択肢が広がったはずの今も、人は死に方を選べないジレンマ、アイロニーを抱えてはいないだろうか。

在宅医療のスペシャリストであり実際に尼崎市で在宅医として活躍をされている長尾和宏著の10万部売れたベストセラー「痛くない死に方」「痛く在宅医」をモチーフに高橋伴明監督が完全映画化。主演に日本映画界の注目の俳優の柄本佑。その他、坂井真紀、余貴美子、大谷直子、宇崎竜童、奥田瑛二など豪華キャストが集結。いつかは自分の親や自分自身に訪れる終期について考えさせられる、必見の一作が完成した。

STORY 在宅医療に従事する河田仁(柄本佑)は、日々仕事に追われる毎日で、家庭崩壊の危機に陥っている。そんな時、末期の肺がん患者である大貫敏夫(下元史朗)に出会う。敏夫の娘の智美(坂井真紀)の意向で痛みを伴いながらも延命治療を続ける入院ではなく“痛くない在宅医”を選択したとのこと。しかし、河田は電話での対応に終始してしまい、結局、敏夫は苦しみ続けてそのまま死んでしまう。「痛くない在宅医」を選んだはずなのに、結局「痛く在宅医」になってしまった。それなら病院にいさせた方が良かったのか、病院から自宅に連れ戻した自分が殺したことになるのかと、智美は河田を前に自分を責める。

在宅医の先輩である長野浩平(奥田瑛二)に相談すると、病院からのカルテでなく本人を見て、肺がんよりも肺気腫を疑い処置すべきだったと指摘される河田。結局、自分の最終的な診断ミスにより、敏夫は不本意にも苦しみ続け生き絶えるしかなかったのかと、河田は悔恨の念に苛まれる。長野の元で在宅医としての治療現場を見学させてもらい、在宅医としてあるべき姿を模索することにする河田。大病院の専門医と在宅医の決定的な違いは何か、長野から学んでゆく。2年後、河田は、同じく末期の肝臓がん患者である本多彰(宇崎竜童)を担当することになる。果たして、「痛くない死に方」は実践できるのか。

「病院」だって「在宅」だって、それを動かすのは、人。病という対象物としてだけでなく、人が人を看取するということを真ん中に置いたら。死を目前に「選択」の嵐が訪れる時、何を最も大切にしたいのか？そこを見据えていければ、最期まで、その人らしく生きることはできると、この映画は囁いてくれる。

内田也哉子(エッセイスト)



<http://itakunaishinikata.com/>